

心理コーディネーターになるために Vol.20

山下桂永子



☆SSW(スクールソーシャルワーカー)からの電話

数年前のあるとき、小学校の SSW の先生から電話があった。学校で男子児童 A さんが問題行動を頻繁に起こしており、教育センターにつなげたいというものだった。

A さんは小学4年生である。低学年のころからトラブルが多く、同学年の子に暴力をふるったり、学校の備品を壊したりするという。学校は保護者と話し合い、医療受診をすすめて A さんは ASD(自閉スペクトラム症)の診断を受けた。服薬も開始して数か月経つが、トラブルは減ることがなく、担任も母親も疲弊している。今度の懇談で担任から母に教育センターをすすめるので、母と A さんへのサポートをお願いしたいとのことだった。

☆教育相談申し込みと初回面談

SSW からの電話の数日後、母からの教育相談の申込みがあり、初回面談が設定された。

初回面談の母の話によると、母は 3 人の子育てと仕事で多忙を極める中、A の起こすトラブルによって、何度も小学校に呼び出され、謝罪、相談、医療受診に行脚する日々。学校からのトラブルの報告の連絡が毎日のようにあり、「先生もお仕事だからしょうがないんですけど、A が悪いことしてるからしょうがないんですけど、もう先生と話をするのもしんどくて。。。』

A 自身も、粗暴なイメージが周囲に定着してしまい、人間関係がうまくいかないこと、トラブルによる先生からの指導が続いたことで担任や他の教員に対して不信感を抱いてしまい、余計に学校ではかんしゃくを起こしてしまう。A の「どうせ先生は聞いてくれへんしわかってくれへん」という言葉に母も同じような気持ちになってしまう。先生との関係もよくない、母としては、服薬させても叱っても諭しても改善が見られず、「学校に言われて病院に行ったけど、薬も本当は飲ませたくない。依存してやめられなくなるんじゃないかと思って」「A は『先生が話を聞いてくれない、わかってくれない』というけれど、私もAのこ

とが全然わからない」と固く疲れた表情で話されていた。

☆学校からの紹介

学校からの紹介の場合、連絡を頂くのは SSW が管理職からが多い。最近ではそれに加えて、学校の生徒指導や支援コーディネーターの先生からのこともあるが、紹介内容を伺ったあと、まずは、教育センターへの紹介が、ケース会議など校内の管理職や関係者によって検討、共有されたものであるのかどうかを確認する。

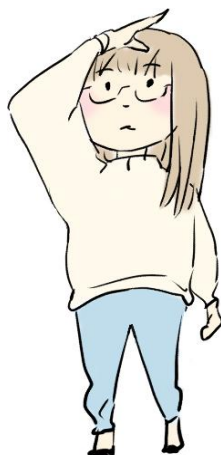


その検討と共有がなされていないと、教育センターに来ることが誰のニーズで、誰からの発信であるのかが曖昧になる。曖昧なままの紹介だと、教育センターにつなぐ意図と必要性が保護者にも子どもにも曖昧なまま伝わることになる。

結果として保護者が「教育センターで発達障害かどうか見てもらえるから行ってみてと懇談で先生に言われた」などという、誤解をしたまま教育相談を申し込んでくることになってしまう。もちろん学校の先生は決してそんな雑な言い方はしていない(はずな)のだが、「誰が困っているのか、その困りごとに対して、学校の指導はどのようなものであったか、なぜスクールカウンセラーや他機関ではなく、教育センターへの紹介なのか」ということを丁寧に説明してもらわないと、保護者の受け取りも雑になってしまう。

そうなると教育センターとしては、その雑な理解を訂正しなければならないのだが、そうすると保護者の方にしてみれば、勇気を出してセンターに連絡したのにどうということなのか、結局どうしたらいいのかと混乱させてしまうことになるのである。

A さんの場合は、SSW が病院受診や教育センターへの紹介などを母に丁寧に説明してくれていたため、スムーズに紹介から教育相談申し込みが行われたが、そもそも学校と家庭の関係がうまくいっていない場合は、学校からの紹介電話があっても、保護者から連絡が来るのは半年後などであったり、そのまま連絡がないこともある。



☆学校と家庭のコミュニケーション

教育センターに、担任不信や学校不信になってしまった保護者や子どもが来ることは多い。大抵は、学校と家庭のコミュニケーションがうまくいっていない、そもそもコミュニケーションが取れていないことが多い。

近年、保護者と学校の先生が顔を合わす機会は以前に比べると格段に少ない。先生と子どもは毎日会っていても、先生と保護者は何か問題がなければまともに顔を合わすことはない。欠席の連絡はスマホアプリから行われ、参観は仕事で出られない保護者も多く、家庭訪問は希

望制で行われていなかったりもする。働き方改革は大事だが、それによってさまざまな関係性が失われているのも事実である。

そんな中で何か問題が起きてしまうと、問題解決にむけての家庭と学校で協力体制を作ることは難しい。顔も知らない、まともに話もしたことがない人たちが急ごしらえで集まって、子どものトラブルという無理難題に挑まなければならないなんて心細いことこの上ない。しかも何とか家庭と学校の協力の元、子どもの問題行動が落ち着いたとしても、また年度が変わって、新しい担任やクラスメイトとの中でうまくいかないことがあると、昨年度はうまくいった対応も、次はうまくいかないこともある。いくら昨年度からの引継ぎがあっても、引き継がれるのは客観的事実がほとんどで、昨年度うまくいった指導の意図や、前担任との関係性が引き継がれるわけではないので、関係づくりからのスタートである。



☆Aさんのその後

Aさんと母は母子並行面接で教育センターに通うことになり、母は多忙な中でも、休むことなく、毎回電車に乗り、急な坂道を登って来所してくださっていた。そのことについて労うと「菓子折り持って謝罪行脚に比べれば全然楽です」と笑って話されていた。また、教育センターに来るときは必ず学校に連絡をして、Aの学校での近況を担任に聞いてから来られるようになり、これも敬服して労うと、「トラブル

の話もあるんですけど、学校からの電話にビクビクするより、こちらから聞いておく方が楽かなと思って」「ここで先生から聞いてきたAのことを話すことって謎解きみたいなんですよ」とくだけた表情で話されるようになった。

そんな中で、学校と教育センターでAさんについて定期的に情報交換を行うようになった。特に学年が上がる時などは、母と話し合った上で、誰と仲が良かったか、誰と、あるいはどんなシチュエーションでのトラブルが多かったのか、母の思い、子どもの気持ち、教育センターでの様子などを学校に伝えていった。

その後、Aは中学校では部活で友人ができ、担任との関係も良好になり、トラブルもかなり少なくなっていた。中学校2年の終わりごろには「初めて1年間学校からトラブルの電話がなかったんです！」と母が嬉しそうに話し、A自身も、以前はなかなか自分の状態や心情について語るができなかったのが、徐々に「どうすればよかったか」「どんなときにうまくいかないのか」など意識をもって話をするできるようになっていた。

服薬についても「自分はテンションがあがるとやらかしてまう」と言い、部活の試合や、大きなイベントのときなど自分の意志で服薬をするなど、自分の状態を理解したうえで服薬コントロールをするようになっていった。

☆意図の橋渡し

学校との連携においては、子どもへのアセスメントの結果や保護者の思いを伝えるだけでなく、先生からも学校での様子やトラブル時の指導とその意図を伺うようにしている。指導そのものよりも、指導の意図が保護者や子どもに伝わっていないことで、先生と子ども、学校と家庭の関係性がうまくいかないことが多いと感じるからである。どんなに適切な指導であっても、その意図が伝わっていないと子どもには単なる嫌がらせのように感じてしまうことがあり、それを聞いた保護者にとっても、我が子への理解がないと感じてしまうリスクが高いのである。そして、その意図をいつもより少しだけ丁寧に説明してもらうことで、先生が保護者や子どもに声をかけやすいようにしていくことを目指している。



また同時に、保護者には、不信感をそのままにせず、どういう意図をもってその指導がなされたのか、それを受けた子どもの状態を「困り感」として先生に伝える方法や、「我が子への理解」という学校への要求を「提案」として伝える方法を一緒に模索して、先生とコミュニケーションを取りながら、お互いの意図が伝わりやすくなるような工夫を考えることをしている。そうすることで家庭と学校のコミュニケーションの橋渡しができればと思っている。

Aさんの母親は、担任とコミュニケーションを取るように努めていた。そうすることで、担任も母にAのことを報告するためにより意識的にAさんの様子を丁寧に見守ってくれるようになったのではないかなと思う。そして学校の先生もそれに応え、Aさんや母にもよく声をかけてくれていた。特に中学校においては、(Aさんにとってはトラブルが起きやすい)行事のときに、Aさんだけでなく母にも担任以外の生徒指導や部活の顧問なども声をかけにいつてくれていたらしい。そうすることで、子どもも親も落ち着いて行事に参加できたように思う。

教育センターの教育相談は、学校にとっては外部機関なので、学校とは異なる援助ができる一方、お互い何をやっているのか見えにくいので、それぞれの援助がバラバラすぎても児童生徒やその保護者を混乱に陥れたり、妙な学校と家庭のパワーゲームに巻き込まれるリスクもある。児童生徒やその保護者が教育センターに相談に来ることが、学校と家庭の間に溝を作ることがあってはならないといつも肝に銘じていなければならないと思っている。

